

地震合同訓練とおした防災教育の効果と課題 —ESD の視点から—

The Effects and Issues of Disaster Prevention Education through Earthquake Evacuation Drill Jointly Conducted with Other Schools: From the Perspective of ESD

横川和章・柳瀬朋子・溝口賢一・真鍋朋聖・磯野久美子・阪上弘彬・名須川知子

YOKOGAWA Kazuaki, YANASE Tomoko, MIZOGUCHI Kenichi, MANABE Tomosato, ISONO Kumiko, SAKAUE Hiroaki, NASUKAWA Tomoko

我が国は、地震、津波、台風などの自然災害が発生しやすい地理的特徴を有しており、これまで様々な災害を経験してきた。これらの災害に対して、学校においても安全への対応や防災教育の一層の充実が求められていると言えよう。本研究では、附属学校園に子育て支援ルームも加えた山国地区合同の地震避難訓練及び引き渡し訓練を計画・実施し、そこでの成果や課題について分析を行った。附属学校園の引き渡し訓練に参加した保護者にとっては、引き渡しの手順の確認や実際の動きを体験できたことが大きな成果であり、それらを通して、防災への意識の高まりにもつながっていると思われる。また、子育て支援ルームでは、合同の地震避難訓練にあわせて、防災に関する講座を開催することで、防災への意識の高まりや自分たちで考えていこうとする姿が見られていた。今回、初めて合同訓練を行うことで、附属学校園及び山国地区全体としての課題であることの認識をより一層共有することができたと思われる。実際に地震災害が生じ、保護者への子どもの引き渡しを行う事態が生じた場合に予想される様々な問題への備えをより具体的に進めていく必要がある。

キーワード：防災教育、地震合同訓練、ESD

Key words：Disaster Prevention Education, Earthquake Evacuation Drill Jointly Conducted with Other Schools, ESD (Education for Sustainable Development)

1. はじめに

我が国は、地震、津波、台風などの自然災害が発生しやすい地理的特徴を有しており、これまで様々な災害を経験してきた。地震災害に限っても、阪神淡路大震災、新潟県中越地震、東日本大震災、熊本地震等、近年多くの地震が発生しているだけでなく、今後も、大規模な南海トラフ地震の発生も予想されている。これらの災害に対して、学校においても安全への対応や防災教育の一層の充実が求められていると言えよう。

今日、学校における防災教育は、安全教育の一部として位置付けられ、学校教育の中では必ず取り扱われるようになっている。防災教育に当たっては、自然との関わり方を含め、自然からの恩恵を感じ畏敬の思いを抱くことがその基盤となるであろう。このような考え方は、ESD（持続可能な開発のための教育）に位置付けられるものでもある。防災教育に限らず、ESDは今回の学習指導要領等の改訂の全体において、基盤となる理念ともなっている¹⁾。学習指導要領等の中では、防災教育の内容は社会や理科などの関連する教科や特別活動の中にも含まれているが、それと同時に総合的に取り組んでいく必要がある。このように、今日の学校教育では、関連する教科等で防災教育を扱うとともに、各種の防災訓練や避難訓練も多く実施されるようになっている。

本学の附属学校園においても、自然災害だけでなく様々な緊急事態に対し、早急に危険を発見し、対応できる体制を確立するために、「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」を作成し、安全確保・安全管理体制の充実を図ってきた。その上で、これまでも、幼稚園、小学校、中学校の附属三校園それぞれで、安全教育・防災教育に取り組むとともに、様々な緊急事態に対する避難訓練を定期的に行っている。しかし、特に地震のような自然災害は、各学校個別に発生するわけではなく、同時に生じる災害である。そのような場合には、必然的に附属学校間の連携した対応が必要になるだろう。したがって、各学校園それぞれで単独に避難訓練を実施するだけでなく、地震後の保護者への子どもの引き渡しも含めた附属学校園合同での避難訓練を実施しておくことは意味があると考えられる。そこで、合同での地震避難訓練を計画し、実施していくこととした。

加えて、本学の附属学校園が立地する山国地区には、附属学校園に加えてやまくにプラザがあり、その中では子育て支援ルーム「かとう GENKi」が運営されている。子育て支援ルーム「かとう GENKi」は、2014年に開設された主に未就園の親子が利用する施設であり、年間延べ約6,700人が利用している。子育て支援ルームは、

学校のような決まった子どもが利用する施設ではないこと、未就園の子どもが多いこと、誰もが自由に利用できる施設であること等から、災害等の緊急時の対応には学校とは異なる配慮が必要とされる部分もあると考えられる。しかし、開設してまだ年数がたっていないこともあり、これまで災害に対する避難訓練等は実施してこなかった。そこで、子育て支援ルームにおける安全確保・安全管理についてあらためて整理していくとともに、地震避難訓練を附属学校園とともに実施することで、安全確保の充実を図っていくこととした。

以上のことから、附属学校園に子育て支援ルームも加えた山国地区合同の地震避難訓練を計画・実施し、そこでの成果や課題について分析を行い、山国地区全体の防災教育の充実のための基礎資料を得ることとした。

2. 山国地区合同地震避難訓練の計画と実施

実施前には、地震避難に必要な物品等を確認するとともに、当日の訓練工程計画の策定や必要な事項について、山国地区での各施設の担当者による準備会議で検討した。その結果、同日同時刻の地震発生を想定して訓練を行うこと、避難経路や避難場所等は各学校園・子育て支援ルームの実施計画にしたがって実施することとした。さらに、地震避難後に予想される保護者への子どもの引き渡しについても、確実に安全に行う必要があるため、今回の訓練に含めることとした。引き渡し訓練についても、これまで幼稚園・小学校で実施してきたが、異なる学校園にきょうだいがいる場合は、複数の学校園での子どもの引き渡しが必要になり、このような引き渡し訓練はこれまで実施してこなかったからである。本来すべての学校園で実際に子どもの引き渡しを行うことが望ましいが、今回は、初めての合同訓練であったので、幼稚園の園児のみで実際の引き渡しを行うこととし、附属学校園に関しては、幼稚園の保護者のみがこの訓練に参加することとした。しかし、小学校や中学校にきょうだいがいる家庭も多くあるので、実際の子どもの引き渡しは行わないが、小学校・中学校でも引き渡しを行うことを想定して、保護者には実際にきょうだいのいる学校にも行ってもらい、引き渡しの手順を確認する作業を行った。

以上のような計画のもと、2018年11月に山国地区合同の地震避難訓練（引き渡し訓練を含む）を実施した。当日は、各学校園・子育て支援ルームでのそれぞれの避難の様子を観察（写真撮影及びビデオ録画を含む）することで、実際の様子を確認した。あわせて、参加した幼稚園の保護者のうち、小学校・中学校にきょうだいがおり、複数の学校園での引き渡し訓練に参加した保護者に対しては、訓練参加後にアンケートへの回答を依頼した。アンケートの内容は、引き渡し訓練に参加しての感想を求めるものであった。アンケートは当日配布し、後日幼稚園まで提出を求めた。

後日、アンケートの集計結果やビデオ収録した映像を持ち寄り、担当者による話し合いを実施し、合同避難訓練に関する振り返りを行った。

なお、子育て支援ルームにおいては、合同の避難訓練を実施することに加えて、緊急事態に利用者を安全に誘導し、スタッフも安全に避難するための防災マニュアルを作成するとともに、「もしもの時に備えて 子育て支援ルーム『かとう GENKi』の親子防災」というテーマで、スタッフによる5回の親子防災講座を実施した。

3. 附属学校園での実践

各学校園での地震避難訓練及び引き渡し訓練の様子を写真1～6に示した。地震避難訓練そのものは、各学校園でこれまでも取り組んできており、そうした取り組みの成果もあり、速やかに避難行動と避難場所への集合が行われていたことがわかる。



写真1 避難の様子（幼稚園）



写真2 避難後の様子（幼稚園）



写真3 避難の様子（小学校）



写真4 避難後の様子（小学校）



写真5 避難の様子（中学校）



写真6 避難後の様子（中学校）

保護者への子どもの引き渡し訓練の様子を示したものが写真7～10である。想定された訓練ができており、ある程度の成果はあったと考えられるが、以下に、保護者へのアンケート結果を参考にしながら、その成果や課題をさらに詳細に分析する。



写真7 引き渡しの様子（幼稚園）



写真8 引き渡し後の降園の様子（幼稚園）



写真9 引き渡しの様子（小学校）



写真10 引き渡しの様子（中学校）

複数の学校園での引き渡し訓練に参加した保護者 36 名にアンケートを配付し、24 名から回答を得た（回収率 66%）。以下にその結果を示す。

引き渡し訓練への参加者（アンケートの回答者）は、母親（20 名）、父親（2 名）、祖父（2 名）であった。また、参加の際の交通手段に関しては、自家用車が 19 名、徒歩が 5 名であり、自宅（あるいは職場）から附属学校園までかかったおおよその時間は、平均で 14 分（最大 45 分、最小 3 分）であった。

「事前の文章による説明や当日の引き取り方法の説明のわかりやすさ」という質問に関しては、おおむね説明はわかりやすかったと回答していた（表 1）。

「子どもをスムーズに引き取ることができたか」という質問に関しては、「思っていた以上に早かった」「想定した時間通りだった」という回答が多かったが、「思っていた以上に時間がかかった」という回答もあった（表 2）。その理由として、「待ち時間が多かった」「列に並んで一人一人個人確認をしている間に時間がかかってしまう」といった理由や、中学校では地区ごとに並んでいたの、「どこに子どもがいるのかと少し戸惑った」という理由があがっていた。

「従来は幼稚園単独で引き渡し訓練を実施していたが、今回附属三校園で実施したことの良かった点、悪かった点」について自由記述で回答を求めた結果、良かった点としては、次のような回答があった。「複数のカ所で子どもがいる場合の引き渡しの順番がわかった」「迎えに行く順番が迷うポイントでもあったので、統一されたことでスッキリした」「小学校と幼稚園の両方に子どもがいるのでどちらから迎えに行ったらよいかルールを示してもらえてよかった」「幼稚園だけでの引き渡し訓練では戸惑ったことがなかったが、三校園では本当の災害じゃなくてよかったと思うくらい簡単なのはなのに戸惑った。練習して良かった」、「小学校は忘れがちで今回 2 人迎えがいることを再確認できた」「小学校もまわるとなると倍以上の時間がかかるということがわかった」といった内容であった。きょうだいがいる場合の引き渡しの手順や方法が明確になったことや移動の実践が体験できたことが大きな成果であったと考えられる。

悪かった点としては次のような意見があった。「小学生は実際にやってないのでどうなるか不安がある」「中学校では引き渡し（生徒と共に）をしていたが、小学校では先生が紙にチェックするだけだったので訓練の意味がないと思った」「今回教室に行かなくても 1 回のチェックで OK でしたが、学校に 2、3 人子どもがいる人は本来の時間ではないと思う」「実際に小学校での引き渡しがなかったので当然スムーズにいったが、訓練になったのか疑問」「小学校の親全員ではなかったので、全員の時の混雑具合が体験できなかった」「本当に引き渡しが必要になった場合、規模が全く違うので混乱するのではないかと思った」等、小学校・中学校では実際に子どもの引き渡しを行っていないことからくる意見が大半だった。「難しいとは思いますが、保護者も含めて全体で訓練しないと課題は見つけにくいと思った」「やるなら幼稚園の引き取りだけでなく、小・中も一緒にやらないと実際にどれだけ時間がかかってどれだけ渋滞などの混乱が生じるのかわからないと思った」等、附属校園全体での訓練をする必要があるとの意見もあった。また、「引き渡しカードを管理されている先生が目立つように旗を持つなどわかりやすくしていただけると実際に災害が発生したときにスムーズに行えると思った」といった改善点の指摘もあった。

「附属三校園合同での引き渡し訓練に参加しての感想」に関する質問には、「やってよかった」との回答が多数を占めていたが、「どちらとも言えない」「必要はない」との意見もあった（表 3）。その理由は、先の質問である附属三校園合同で訓練をしたことの良かった点悪かった点についての自由記述

とおおむね同様のものであった。「やってよかった」理由としては、「実際に引き渡しにかかる時間の目安を知ることができた」「引き渡しの要領が分かった」「文章や言葉の説明だけでは実際に災害があった時に混乱してしまっただけでどうしたらいいのかかわからないと思うので、実際にやってみて手順が分かって良かった」「実際にどう動けばいいのかやこんな問題点があるということがわかった」「実際に災害が発生したことを想定して訓練できたから」

表 1 説明のわかりやすさ

わかりやすかった	15 名
どちらとも言えない	4 名
わかりにくかった	5 名

表 2 スムーズに引き取ることができたか

思っていた以上に早かった	6 名
想定した時間通りだった	12 名
思っていた以上に時間がかかった	5 名
無答	1 名

表 3 訓練に参加しての感想

やってよかった	15 名
どちらとも言えない	6 名
必要はない	3 名

等、引き渡しの手順を確認できたこと、実際の動きを体験できたこと、訓練ができたことなどを評価していることが示された。

「どちらとも言えない」「必要ない」とする回答の理由としては、「実際三校園での引き渡し起きた場合、車で来た人が多数になると駐車場が混乱すると思う」「訓練なら実際の時を想定した訓練にするべき。実際はもっと保護者も来るだろうし、今回の幼稚園の保護者のみの合同はもったいないなと思った」「実際に小学生、中学生も全員引き渡しの訓練にしないと駐車場や道路での混み具合がまったく違ってくるのであまり現実味がないのでは」「三校園合同ですべての保護者が参加するなら意味があると思うが、幼稚園の保護者のみ参加しても実際は駐車場等大混乱になるだろうし参考にならない。引き取りまでの所要時間も全体で行うと確実に違ってくるだろう」等、引き渡し訓練に小学校・中学校の保護者が参加していないことに起因する理由があげられていた。

以上のように、今回実施した附属学校園合同での訓練に対しては、保護者は、引き渡しの手順を確認できたこと、実際の動きを体験できたこと、訓練の積み重ねができたことなどから、ある程度肯定的に評価していることが示された。しかし、今回の引き渡し訓練に参加したのが幼稚園の保護者のみであり、すべての附属学校園で同時に子どもの引き渡しが行われる場合とは状況が異なっており、実際にそのような場合が生じた際の課題が多く残っていることから、訓練としての不十分さも感じていたと考えられる。それでもなお、多くの保護者が合同の訓練の意義を理解していたことが訓練をやってよかったという受け止めとなっていただろうし、参加した保護者にとっては防災意識を高め、防災について考えることにつながっていたと思われる。

4. 子育て支援ルーム「かとう GENKi」における実践

子育て支援ルームでは、合同避難訓練に加えて、2018年9月から2019年1月にかけて月1回テーマを決め、親子防災講座を開催した。開催日時と内容については、事前にHPやチラシにて知らせ、普段、親子が遊んでいる部屋で自由に参加できるよう配慮した。基本として家族一緒に楽しみながら、災害や防災の知識を身につけてもらえるよう最新の防災情報をクイズ形式で行うこととした。以下、5回の内容について示す。

【第1回（2018年9月）】参加者：親子50名

テーマ：「マニュアルではなく、自分自身の知恵からアイデアを生み出す防災」

内 容：①ビデオ「地震の備え」について

②クイズ「最新防災常識チェック：地震編」に挑戦

③ママバックを避難バックに利用

毎日携えているママバックを「1次持ち出し袋（ないと困る物）」としての避難バックに利用できる方法を、参加者と一緒に考え、「あったらいい物」を「2次持ち出し袋」として分けて準備しておく方法をレクチャーした²⁾。

第1回の講座を開催する前に、参加者に聞き取り調査をした結果、50名のうち32名が避難グッズを自宅に置いていると回答があったが、そのうち、避難グッズの中に入っている物がわかる利用者は1名だけだった。その理由として、「セットで購入するので、必要なものがすべて入っているから確認しない」という理由がもっとも多かった。また、「普段使わないので、倉庫の奥に入っている」という回答もあり、避難グッズの必要性に対して意識が低いことが分かった。そこで、利用者の避難グッズについて意識を高めるために、避難時に自分が必要だと思うものを付箋に書き、「ないと困る物」と「あったらいい物」に分けて模造紙に貼ってもらった。この内容を基に、第1回親子防災講座を行ったところ、「携帯電話が使えなかったら、家族の連絡先が分からないことに初めて気づいた」「災害に遭うのは昼間とは限ってないので、ライトは必須だと思った」など、災害時の避難グッズについて意識を高めるきっかけになった。このように参加者の感想として、「避難グッズは揃えているが、自宅に置いているので外出時に災害が起こった場合不安だった。普段、持ち歩いているバックが避難バックになることを聞いて、早速、やってみようと思った」や、「防災について意識して考えることがなかったので、良い機会になった。地震についての防災常識チェックもクイズ形式なので分かりやすく勉強になった。またしてほしい」という意見も出て、意識することについての気付きを得ることができた。

【第2回（2018年10月）】参加者：親子32名

テーマ：「子どもを連れての避難はどんなもの？」

内 容：①クイズ「最新防災常識チェック：水害編・避難所編」に挑戦

②ママバック（避難バック）を持って、親子一緒に避難場所までの避難経路を確認

実際に子どもと手をつないで歩いてみることで、必要以上に時間がかかること、また、改めて必要なものに気付く。また、手をつないで歩くことが困難な場合、兵児帯を使ったおんぶ紐の方法をレクチャーする（写真4）。

子育て支援ルームでは利用者の多くが自家用車を使用し、避難場所が駐車場になっているため、「1次持ち出し袋」は普段のママバック、「2次持ち出し袋」は車の中、「3次持ち出し袋」は自宅に保管というように、それぞれの家族が工夫して避難バックの中に入れるものを考えていった。この結果、1次持ち出しから3次持ち出しまで整理され、より詳細な持ち出しに必要なものが明確となっていった（表4）。

参加者の感想としても、「靴箱で混雑するかと思ったけれど、子どもの靴を手で持つことで全く混雑することなく避難できた。こんなに早くみんなが移動できるとは思わなかった」や「建物が、耐震構造かどうかで避難の意識も変わるとあったので、みんなでアイデアを出し合いたい」といった意見や、「いざという時、子どもを抱いていると両手が塞がっていて何もできないが、カーテンを割いておんぶ紐にすれば両手が空くので、障害物も除けることができる」という具体的な工夫も出されるようになってきた。

表4 持ち出し袋に入れるもの

1次持ち出し袋（ママバック）	2次持ち出し袋（車の中）	3次持ち出し袋（自宅に保管）
・おむつ ・水、おやつ ・現金 ・携帯電話 ・自宅の鍵 ・ウェットティッシュ ・眼鏡、コンタクトレンズ ・連絡先（家族や親類、友達） ・LEDライト ・ホイッスル ・生理用品 ・母子手帳 ・健康保険証 など	・着替え ・携帯の充電器 ・お気に入りのおもちゃ ・水、食料 ・保冷バック ・ラジオ ・マルチツール ・救急用品 ・ブランケット など	・母子手帳のコピー ・携帯の充電器 ・お気に入りのおもちゃ ・電池 ・現金 ・着替え ・水、食料 ・保冷バック ・サランラップ ・レジャーシート ・カセットコンロ ・化粧品 ・救急用品 ・新聞紙 ・ラジオ ・タオル ・紙コップ ・紙皿 ・生理用品 ・ライト など

【第3回（2018年11月）】参加者：親子62名

テーマ：「地域で力をあわせて助かる可能性を増やす：山国地区合同避難訓練」

内 容：①ビデオ「南海トラフ地震」について

②クイズ「最新防災常識チェック：まとめ」に挑戦

③山国地区合同避難訓練

第3回では、合同の避難訓練を実施した。子育て支援ルームでは、スクリーンにDVDを投射し、南海トラフ地震が発生、加東市は震度6弱、揺れの時間は3分弱を想定した。そこで、本施設は、震度6～7に達する大規模地震で倒壊、崩壊しない、新耐震基準の建物のため、揺れが収まるまで身を守ることを訓練した。揺れが収まったと想定した後、避難場所である正面の駐車場に全員で移動した（写真11、12）。その後、人数確認をし、附属学校園にきょうだいが通っている家族は、指定されている引き渡し場所へ向かった。



写真11 避難の様子



写真12 避難後の人数確認の様子

今回が初めての参加者から「子どもが2人いるが、外出時に抱っこ紐を持ち歩いていないので、2人を抱えて逃げる時に困った」「子どもが逃げる時にぬいぐるみを持っていて、こけた時のことを考えると、大人だけでなく子どもも両手が使えるようにしておかないといけないと思った」や「子どもが大きくなってくると、最低限の物しか鞆に入れていないので、非常時の物が入っていないことに不安を覚えた」という感想が出された一方、これまでの講座に参加した親子からは、「抱っこをしていると、自分がこけた時、子どもが下になるので危険だと思ったが、おんぶ紐の方法を教えてもらって、それなら、こけても両手をつけるので安心できる」や「荷物を取る時に混雑して、なかなか準備ができなかった」や「2人の子どもと荷物を抱えるのは大変だった。また、上の子は、いつもしているように、自分で靴を履きたがるので、時間がかかり困った」等、おんぶ紐の効果とやはり、実際にしてみると難しいことがわかったという感想が寄せられた。

【第4回（2018年11月）】参加者：親子50名

テーマ：「身の安全の確保と防災グッズを使ってみよう」

内 容：①身の安全を確保できる場所の確認

②防災グッズを使ってみよう「簡易トイレの使い方」

第4回目は、ルーム内で、親子一緒に身の安全を確保できる場所や物について参加者と考えた。特に、防災上でもっとも大切な「簡易トイレ」の使い方や、水分吸収量について実験をとおして学んだ。その結果、「プレイルームのすべり台の中や机の下、鞆を置いている備え付けの棚の中が意外と広いので、子どもを隠せる場所になると聞いて安心した」「1回目のレクチャーで、便利なグッズ（簡易トイレ）があると聞き購入していたが、使い方がわからないといざという時に役に立たないことがわかった」「どのくらい水を吸収するののかと思って遊び心で水を入れたが、意外と吸収し、ゼリー状になるので、処理が便利だと感じた」等の参加者からの感想があった。

【第5回（2019年1月）】参加者：親子48名

テーマ：「山国地区合同避難訓練の振り返り」

内 容：①映像からの気づき

②今後の課題

2018年11月に実施した山国地区合同避難訓練の映像を見て、気付いたことや、今後の課題及び親子防災講座の内容について話し合った。合同避難訓練当日の参加者の感想の中に、「2人を抱えて逃げる時に困った」「鞆のところで混雑したので大変だった」「荷物を取る時に混雑して、なかなか準備ができなかった」とあったが、今回、映像を見て再確認できた。そこで、「どのように危険を回避すればよいか」と「母親の負担を軽減する方法」に焦点を当てて話し合った。「荷物を取る際の混雑」は、荷物と同じ場所に置いているおんぶ紐を取り、その場で、子どもを背負っていたためであることがわかった。そこで、回避方法として、「おんぶ紐は、母親が身に付けたまま過ぐすこともできる」「おんぶ紐は、荷物と別の場所に掛けておくこともできる」という意見がでた。また、「きょうだいがいる母親の負担を軽減」については、「周りの大人の臨機応変な援助が必要」という意見がでた。

以上のように、避難訓練を含めた5回の講座をとおして、保護者と実践することで、少しずつ、災害へのグッズの準備と具体的な避難経路への意識が高まっていったことがわかった。

5. おわりに

附属学校園に子育て支援ルームも加えた山国地区合同の地震避難訓練及び引き渡し訓練を計画・実施し、そこでの成果や課題について分析を行った。

附属学校園の引き渡し訓練に参加した保護者にとっては、引き渡しの手順の確認や実際の動きを体験できたことが大きな成果であり、それらを通して、防災への意識の高まりにもつながっていると思われる。また、子育て支援ルームでは、合同の地震避難訓練にあわせて、防災に関する講座を開催することで、防災への意識の高まりや自分たちで考えていこうとする姿が見られていた。しかし、今回は、附属学校園の一部の保護者や子育て支援ルーム利用者の参加のみにとどまっており、それ以外の保護者へは広がっていない。関係するすべての保護者の意識を高めていくことが必要であろう。

また、実際に地震災害が生じ、保護者への子どもの引き渡しを行う事態が生じた場合に、今回の訓練とは異なる様々な問題が生じることが予想される。今回の合同訓練の中でも、そのような問題まで十分考慮できてはいない。加えて、実際にそのような事態が生じた場合に附属学校園としてどのように対応するかについても、現時点では十分な備えができていないと言いがたい。しかし、初めて合同訓練を行うことで、附属学校園全体としての課題であることの認識をより一層共有することができたと思われる。子育て支援ルームも含めた山国地区全体で、

予想される様々な問題への備えをより具体的に進めていかなければならない。

自然災害の多い我が国においては、防災教育のより一層の充実が求められている。それは、形式的な訓練の繰り返しや単なる知識の習得でなく、自然環境にどのように向き合っていくかが重要となってくる。自然環境への関心を深めその恩恵を感じるとともに自然への畏怖を抱き、自然の脅威に対する危機意識をもちながら防災を考えていくことが必要であろう。

引用文献

- 1) 中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
- 2) あんどうりす（2017）『りすの四季だより』新建新聞社